

第 2 回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル	
日時:令和6年11月17日(日)	場所:本庁舎1階
参加者:市民委員40 名、構想日本・コーディネーター、市・事務局	
コーディネーター : A 班 構想日本 総括ディレクター 伊藤 伸 B 班 構想日本 シニアフェロー 定野 司 構想日本 フェロー 柏崎 亮太	
議事要旨: 1. 開会 2. 前年度の提案書について 3. 東大阪市の取り組み(子ども・子育て施策&地域福祉)について	<省略>
4. グループワーク <u>A 班</u> <前回欠席者の自己紹介&子どもや高齢者について感じる事> 委員 A-12: 市内在住の大学生。子どもや高齢者と接する機会は少ない。色々な方の意見を聞きたい。 委員 A-25: 市内在住の高校生。小さな子どもや高齢者との関わりはあまりない。どうすれば関わりを持てるのか、ここで学びたいと思っている。 <東大阪市の子どもが今よりも住みやすいと感じるためにはどうすればいいか> コーディネーター: 前回の提案書では ①道路が危ない。(特に自転車) ②遊び場がない。(屋外の場合、日陰がない。屋内には長時間過ごせる場所がない。友だちの家は気を遣う。) ③公園の使い方(ボールや花火を含め自由に遊べない。) 自分が生活する中で不便に感じる事があれば教えてほしい。	

委員 A-5:

家の近くに公園があるが、利用者が年々減っている。最近工事が終わったが、砂場が無くなった。遊び場も減り、子どもも来ていない。屋内で遊んでいるものと思う。

コーディネーター:

小学生の頃は、公園で遊ぶことが多かったか。

委員 A-5:

友だちと公園で遊ぶことが多かった。

コーディネーター:

実際砂場が無くなってきているのか。

事務局:

初めて知った。所管課に確認してみる。

委員 A-26:

高校生のときに感じていたのが、勉強する場所がない、ということ。図書館はあるが、利用者が多く、席の争奪戦になっている。家では集中できないとき、外で勉強したいと思っても無料でできる場所がない。

コーディネーター:

図書館で勉強ができないときは、どこに行っていたのか。

委員 A-26:

ファーストフード店やカフェに行って勉強していた。

委員 A-24:

今高校生だが、テスト期間中の放課後に勉強したいと思っても、夕方の永和図書館はほとんど満席。結局ファーストフード店に行って勉強している。

お金もあまりないので、図書館で勉強できればいい。

委員 A-14:

カフェで勉強している学生をよく見かける。お小遣いも限られているはず。学生向けにそういった場所が身近にもっと増えるといい。

委員 A-17:

通っている塾に自習室があるので、そこを利用している。勉強できる場所が少ないとはあまり感じない。

コーディネーター:

他に普段生活する中で、こうなればいいと思うことはあるか。

委員 A-21:

家の周りには小中学校や保育所、児童施設が多い。子どもも多く見かけるが、今のご時世、子どもの意見を聞こうにも、「変な人」と思われてしまうため、聞くことができない。

また、公園も近くにあるが、夏の夜中に花火をしている子どもがいて、眠れないことがある。

注意したいが、自分が悪者になってしまうと思うと注意もできないので、警察に相談している。

そういったマイナス面もあるが、公園は必要だと思う。今の子どもたちは元気がないように感じる。元気な子どもが増えてほしい。

コーディネーター:

マナーとの兼ね合いは難しい。

委員 A-21:

今は注意しづらい。少し前までは簡単に注意できていたが、トラブルになってしまうのも怖い。

コーディネーター:

前回のラウンドテーブルでも似た話があった。会社として、通学中の子どもたちに挨拶をしようとしたが、子どもたちは知らない人に声をかけられても答えないように、と学校の先生から言われていると聞き、挨拶をしてもいいものか迷い始めた、といったものであった。

できるだけ知らない人との接点は持たない方がいいのか、それとも声をかけることによって接点を持った方がいいのか、皆さんはどう考えるか。

委員 A-3:

接点は持った方がいい。ただ、初対面の人からいきなり声をかけられると警戒してしまう。日頃から挨拶だけでなく、イベントなどを通してつながりを持つことができれば、挨拶をしても警戒されない。

委員 A-1:

私も接点は持つ方がいいと思う。初対面での挨拶に関して、成長するにつれて警戒心が強くなる。愛ガード等に対して、低学年のうちから挨拶することを習慣づけできれば、市全体の子どもたちに繋がっていくと思う。

コーディネーター:

2人に共通しているのは、急に挨拶すると不審に思われるので、日頃からみんなで挨拶するようにする、ということ。そうやって交流の場を増やしていく。

委員 A-12:

朝に挨拶してもらったら元気になる。自分のことを見てくれていると思えて嬉しい。急に挨拶されても不審に思わない。接点を持つことは大切だと思う。

委員 A-13:

愛ガードから始めるのはとても良いこと。愛ガードは挨拶の相手が不特定多数なので、不審に思われにくい。不審に思うのは、挨拶された方が、自分が特定されているのではと感じたときのはず。挨拶運動についても不特定多数なら問題ない。仕事柄、朝に駅立ちし、不特定多数に挨拶をしている。そこから始めていけると、特に女子中高生も抵抗なく挨拶を受け入れてくれるのではないかな。

コーディネーター:

特定されていると思われないようにする、ということは大切。

数年前、埼玉にあるマンションの管理組合が「会ったときの声かけはやめましょう」といった貼り紙をしたことがあると聞く。理由は不審に思われかねないから。マンションの管理組合の役員会で決まったとのこと。その後、マンション住民からの反対意見が出て、結果撤回された。特定されるのは怖いけど、同じマンションに住んでいて、何かあった時に備えて顔見知りになっておいた方が安心だと、住民は考えたからだと思う。先ほどの意見にもあったように、日頃からの積み重ねが大切ということが、挨拶にも表れるのだと思う。子どもの話だけでなく、地域の助け合いや地域活動そのものの話でもある。

話を戻して、他にこうしたらいいと思うことはあるか。

委員 A-7:

発達障害の子どもがいる。IQ は高いが、ADHD で多動、自閉症という特徴があり、塾に通いたくても通えない。勉強する意思はあるのに、教室で授業を受けるのも難しい。

知的障害であるが、療育手帳の対象ではない。支援学校への進学はできず、地域の学校へ進学せざるを得ない。受験も必要であるが、そういった子どもたちが勉強できる場所が市内にない。学校の勉強に追いつきたくても追いつけない発達障害のグレーゾーンの子どものも同じ。市もしくは地域で勉強を見てもらえる場所があるといい。

仕事先のお客さんに市内に住む中学生たちがおり、給食が不味い、といった声を聞いている。無償化は有難いが、食べられないくらい不味いと言う。数人ではなく、50人くらいの子どものも言っている。保護者からも無償化になったのはいいが、給食を食べてこないせいで、下校後すぐに家で食事をしなければならぬので結果食費がかさむ、といった話を聞いている。ただ、別の中学校区の子どものも話を聞くと、美味しいと言う。業者が違うのではないかと思われる。味が無い、と言っている子どももいる。小学6年生の子どものもたちは中学校に慣れるために、月に1回中学校へ行く機会があり、給食も中学生と同じものを食べる、それが嫌だと感じる子どももいる。成長期の子どもが3年間昼食を食べられない、給食が嫌で学校に行けない、といった現状を市は把握しているのか。

コーディネーター:

前半の話について、ないと感じるのは勉強の場所だけか、居場所はどうか。

委員 A-7:

居場所についてはデイサービスがあり、利用している。ただ、デイサービスは集団生活を送るために訓練する場であり、勉強を教えてくれる場所ではない。

診断を受けなくてもセルフプランでデイサービスを利用できる自治体があるなか、東大阪市は医師の診断を受け、診断書が出た人でないとデイサービスを利用できない。そのため、診断を受けられないグレーゾーンの子どものもたちは、デイサービスが利用できず居場所がないのが現状。また、東大阪市は市から医療機関への紹介状がないと医療機関に受診できない。紹介状を用意してもらっても、医療機関への予約が半年、診断を受けるまでにさらに半年かかるので、受給者証発行までに大体1年半かかる。このタイムロス解消のために、セルフプランを東大阪市にも導入してもらえないか、と考えている。

コーディネーター:

事務局どうか。

事務局：

先ほどのお話の通り、東大阪市ではセルフプランではなく計画相談をつけていただいている。ご意見は所管課に共有する。

コーディネーター：

周りに発達障害の子どもがいないと馴染みがないかもしれないが、全ての子どもが幸せに暮らせる「子どもファースト」を考える上で、大切なことである。

続いて給食問題だが、一昨年配食事業者による配食ができなくなり、1ヶ月間給食が止まり、弁当持参が必要となった。現在業者は変更されたのか。

事務局：

給食が止まっていた件について、その業者は配送だけ担っていた。調理業者自体は変わっていない。また、止まっていたのは小学校給食のみであり、今回の中学校給食とは関係がない。

コーディネーター：

給食についての指摘は市に届いているか。

事務局：

中学校給食が始まったタイミングで、アンケートを実施したと聞く。そういった声は一部ではあったかもしれない。委員が指摘された地域の調理業者について、詳細は分からない。意見については、所管課に共有しておく。

コーディネーター：

どの年代の子どもたちから直接話を聞いたのか。

委員 A-7：

小学生や中学生、今すでに高校生になった子どもたちから話を聞いた。給食のおやつも小魚1匹のみの日があったと聞く。保護者も苦情を言いに行ったそう。先生も我慢して食べなさい、と指導する。小学校までたくさん食べていた子どもも、全然食べていない。50人以上の子どもたちからその声を聞いている。業者を選定する際、PTAやお年寄りが味見をしていると聞くと聞くと、子どもにさせてあげたらいいと思う。

事務局：

味付けについては文科省が定める基準に従っており、栄養計算された上で献立は考えられている。塩分量も定めがあり、市の栄養士や委託の場合は委託先の栄養士・市も関わりながら献立を考えている。大人と子どもで味覚に違いがあるので、味見を子どもにさせてあげられるかは分からないが、今日出た意見は、所管課に共有しておく。

委員 A-14：

給食センターは長い間変わっていないのか。

委員 A-7：

中学校給食が始まったのはつい最近。小学校の給食センターとは異なる。
中学校もおそらく地域によってセンターが異なるのでは。

委員 A-14：

自分も子どものときに食べていた給食が美味しくなかったのを、学校に意見したところ少し改善した。

委員 A-7：

調理室が併設された小学校の給食は美味しいと聞くんが、センターになるとあんまり、といった声も。

コーディネーター：

子どもたちに意見を聞いてみたい。

委員 A-22：

市外の中学校だったため、東大阪市の中学校給食は分からない。

委員 A-5：

小学生の頃中学校登校があり、その時初めて食べた給食は冷たくて美味しいと感じなかった。ただ、中学校に進学すると味に慣れたからか美味しくないとは感じない。
汁物は温かいが、たまにおかずが冷たいことも。業者によって違うかもしれないが。

コーディネーター：

他市で給食をテーマに自分ごと化会議を実施したことがあるが、その時もたくさんの意見があった。給食費は国が示す範囲内で市町村が決める。給食費はあくまでも食材費で、給食センターの維持管理費は別。

事務局：

1食あたり 240 円。

コーディネーター：

食材費が上がっているの、量が少なくなってしまうのか。東大阪市の場合、ほとんどはセンター方式か。

事務局：

西地区は単独調理校がまだ残っており、東・中地区はセンター方式が多い。

コーディネーター：

給食について感じる事があれば、改善提案シートに記入をお願いしたい。給食について他にはどうか。

委員 A-24：

今高校生だが、中学校に入学する1年前に中学校給食が始まった。小学生の頃は学校内の調理場で作られており、美味しかったのでおかわりする子どもも多かった。それが中学生になると余る量が多くなった。美味しくなくてみんな食べない。給食業者が行う廃棄量調査の内容が手紙として生徒に配布されるが、美味しくなかったら子どもたちは食べない。量を作っても食べられなければ本末転倒だと思う。中学生の弟と妹がいるが、学校から帰って母親が作ったおにぎりをたくさん食べている。

コーディネーター：

個人の意見を超えており、多くの方が感じているものと思う。

事務局：

無償化を実施するにあたって、市補助で1品美味しいものを追加するといった議論もあった。提供する以上当然栄養管理しながらクオリティーを上げることも必要だと思う。本日、所管課不在のため、あらためて整理した上で次回の機会の説明させて欲しい。

コーディネーター：

国の基準で小中学生の摂取カロリーが決まっている。給食費の兼ね合いもある中、全てをクリアするには牛乳が必要になるが、家庭でご飯と牛乳と一緒に食べる人は少ない。

B 班のコーディネーターである定野さんは元々足立区の教育長であった。足立区は子どもを対象にしたアンケートの結果を受けて、1度牛乳をやめた。国基準を満たすために給食費は数十円上がったが、子どもの満足度調査をすると1年間で劇的に上がったと聞いている。

給食は学校生活において重要な要素だと感じる方が多いはず。子どもファーストを考える上で、給食は切り離せないところ。次回事務局から少し説明いただきたい。

他に、子どもが生活する上で不便だと感じることはあるか。

委員 A-27:

先ほどの図書館での勉強に関連して、そもそも図書館側が自習を禁止しているところもあり、学生は利用しづらい。周りの目も怖い。もっと勉強しやすい場所が増えるといい。

事務局:

読書する場として提供しているため、問題集を持ち込んでの長時間の勉強は禁止しているところがある。学習室として提供していないということもあり、自治体によって基準は異なるかと思う。

コーディネーター:

こういったところに勉強の場があればいいか。図書館がもっと開放されたらいいのか。それとも図書館以外の公民館等で勉強できるようにすればいいのか。

委員 A-23

そもそも学校自体が勉強の場にならないのか、と思う。放課後に学校の教室を使わせてくれるのが一番良いのかな、と思う。

ただ、気分を変えて友達と一緒に、先生の目を気にせず勉強したいという気持ちもあると思う。Liqlid の書き込みにもあったが、空き店舗や廃校も活用しながら、足立区の給食と同様、中高生当事者の意見を聞き取れる機会があるといい。

今回のテーマが子どもの居場所についてであるが、先ほど給食に関して多くの意見があった。子どもたちは1週間の大半を学校で過ごすので、学校は子どもたちにとって大事な居場所である。給食についても今回この場に参加された方々から出た意見として、大切にしていけたらと思う。

コーディネーター:

先ほど空き店舗や廃校といったキーワードが出た。

放課後は何時まで学校にいてもいい、といったきまりはあるか。

事務局:

学年・曜日によってカリキュラムが違うので、下校時間は変わる。ただ、カリキュラムが終わり次第、留守家庭児童育成クラブに入所している子どもたちを除いては、速やかに下校することになる。

特段時間の指定はないと思う。

コーディネーター：

学校に残って自習できないのか。学校だったら勉強していいはず。

学校だと自習しづらいか。

委員 A-27：

学校でいい。

委員 A-25：

通っている私立学校では教室とは別に学習室が開放されており、そこでなら部活動の時間中に自習することができる。先生も監督してくれているので、安心して利用できている。

コーディネーター：

私立の学校の方がそういった面では自由度が高いかもしれない。

子どもたちが勉強できる場をどう作っていけばいいか。意見はないか。

委員 A-7：

小学生の子どもを持つ保護者として思うのは、勉強できる場づくりの前に、そもそも子どもが学校で過ごす時間が減っていること。クラブ活動の時間が週 1 から月 1 になり、スポーツに触れる機会が減った。住んでいる地域では、放課後に中学校の先生が校舎とは別の場所で勉強を教えている。そういったことが他の地域でもあればいい。地域の公民館で大学生がバイト代わりに小学生の宿題を見てくれる、といったことがあれば、子どもも保護者も助かる。シングルマザーの家庭を対象に無料で利用できる塾があり、地域の大学生が講師として来てくれる取り組みもあると聞く。こういった取り組みが地域の公民館でできたらいいと思うし、教職課程を履修している学生にとっては勉強になるはず。地域の高齢者の方が勉強を見てくれるのもいい。

また、留守家庭児童育成クラブの利用料はおやつ代を含めて 8,800 円。近隣市に比べ 2,000 円～3,000 円程度高いと聞く。大阪市は年間500円。利用できる人数も限られており、小学校進学と同時に保活と同様、学童活動が必要。民間の学童を利用する方もいるが、利用料は月3万円。保護者は働かなければならないので、入れざるを得ない。

コーディネーター：

前半の公民館等を活用した勉強できる場所づくりと留守家庭児童育成クラブはつながるところがある。

これまでの留守家庭児童育成クラブは子どもを預かる場所であったが、そこに教育の要素を入れていこうとする動きがある。学童クラブに高齢の専門的な方に定期的に来てもらう、もしくは海外からの留学生が英会話を教えにくるといった事例を聞く。留学生にとっては、日本語の勉強にもつながっている。

<子どものために大人ができることは何か>

コーディネーター：

行政にしかできないことももちろんあるが、まずは自分たちでできることはあるのか、といった視点で考えていきたい。

委員 A-11：

積極的に子どもたちに話しかけていきたいと思うが、周りの目が気になる。自分でできる範囲とすれば、面識のある近所の方。挨拶を積み重ねていくことで、お互いに何かあったときに助け合えるのではないかなと思っている。接点を持つために、まずは挨拶から始めるべきだと考える。

委員 A-15：

既存の場所を活用する、といった話があったが、空き店舗等となると、維持費を含め経費がかかってしまう。公民館や高齢者が過ごしている施設等、今利用されている施設を活用してはどうか。

また、勉強できる場所についての話もあったが、そもそも「学校＝勉強する場所」といった認識が子どもたちにないのでは。昨日中学生の子どもの土曜参観があり、学校へ行ったところ、クラスの1/3が欠席、出席している子どもの多くが机に突っ伏して寝ている。黙々と勉強している子どもは数人しかいなかった。先生も注意していなかった。生徒が授業中トイレに行く際も先生に声をかけることはなく、後ろに控える先生が後ろから付き添っていた。外で勉強できる居場所をつくるよりも、まずは学校の中に子どもの居場所をつくるのが大事ではないか。

欠席者の机の上にはざるが置かれており、そこに配布されたプリントを入れていた。次に出席したときにそこからプリント類を受け取る仕組みだという。そのざるが置かれた机が多かった。土曜日だったことも影響していると思うが、出席日としてカウントされるのにどうなのか。他のクラスも見たが、似たような感じだった。

コーディネーター：

参観日はそういうものなのか。

委員 A-5:

部活動の試合等で休んでいることもあると思う。私のクラスはみんな授業を受けている。ただ、参観にはほとんど保護者が来ないので、通常の授業と同じ。1クラスあたりの生徒数も少なく、欠席者は目立つ。

コーディネーター:

学校によっても違いがありそう。

委員 A-9:

これまでの話を聞いていて思うのは、私自身子どもがおらず、周りにもいないため、当事者意識が持てていないということ。近くに子どもがいれば、課題も見えてくるかもしれないし、こうしてほしいといった強い気持ちも生まれるかもしれないが、そうではない。自分にできることは何かと考えるが、挨拶しようにも不審者に思われかねないし、難易度が高い。子どもが学べる場所を作ってあげたくても、仕事をしながら活動できるのかと思うと、消極的になってしまう。

職場に子育て中の社員がおり、子どものことで急遽早退となることがある。そういったとき、会社全体で男女関係なく快く送り出しており、抜けた穴は職場内でカバーしている。小さいことだが、そういった手助けが今の精一杯といった状況である。

コーディネーター:

最後にお話された手助け自体がすでに子どものためのサポートである。

会社としてそういった方針を示されているのか。

委員 A-9:

少し前であれば、急な早退だとなかなか叶わないこともあった。今はコロナ禍も経て、その辺りは柔軟になってきたと感じる。

子どもだけでなく、親の介護等、自分のまわりもいつどうなるか分からないので、快く送り出せる雰囲気・環境づくりに努めている。

コーディネーター:

他にどうか。

委員 A-20:

自分にできることを考えたが、具体的にはない。

近所の道でキャッチボールをしている子どもを見かける。ボール遊びができる場所が今はない。私が幼い頃は広場が多く、同級生とよく遊んでいた。そういった場所があればいい。可哀想に思っている。

コーディネーター：

ボール遊びをする場所がない、といった話は昨年のラウンドテーブルにもあった。

委員 A-8：

近隣の公園はボール遊びが禁止されていた。少し前までは放課後、小学校の校庭が開放されていたので、利用していた。友達の家で遊ぶのも気を遣うので、安全に遊べるものとして、公園でゲームやカードゲームをして過ごしていた。

委員 A-22：

公園に日陰を作してほしい。

コーディネーター：

公園に日陰があれば、友達と公園を利用するか。

委員 A-22：

公園自体や併設のトイレがきれいであれば、利用する。

コーディネーター：

身近な公園はどうか。

委員 A-22：

トイレがない。公園の周りに店がないので、買い物もできない。

コーディネーター：

子どもが遊びたいと思える公園の要素としては、きれいで、日陰があって、友達と会話ができるようなベンチがあることか。

東大阪市には150くらいの公園があると聞く。中央公園のような大きな公園もあれば、小さな公園もある。次回、公園マップを示してもらうことは可能か。

事務局：

調整する。

委員 A-2：

子どもを見かけたときによく観察して、その子どもが置かれている状況に気づいてあげることが必要だと思う。挨拶を含め日頃からの積み重ねが大事。

コーディネーター：

自身の周りではそういうことができていると思うか。地域での支え合いは感じるか。

委員 A-2：

できているとは感じない。他人の子どもであっても、自分の子どものようによく見てあげることが大切。

コーディネーター：

こういったところから大人ができることがあるのでは。他にあるか。

委員 A-21：

市内に子ども食堂はあるのか。

コーディネーター：

ある。事務局から説明をお願いしたい。

事務局：

民間が独自で運営されている子ども食堂が市内に30か所近くある。実施場所に偏りがあり、地域によっては行きづらいエリアもあるかもしれない。

コーディネーター：

運営は基本的に民間か。

事務局：

民間で運営しており、市は運営補助を行っている。

コーディネーター：

東大阪市に限った話ではなく、他自治体でも課題なのが、子ども食堂の実施頻度。毎日実施は難しい。

事務局：

週に1回、もしくは月に2回が多い。

コーディネーター：

子ども食堂の関係で他にあるか。

子ども食堂に関わったことはあるか。

委員 A-13：

保護司会の更生保護女性会の関係で、子育て支援の一環として手伝ったことがある。

コーディネーター：

市の助成を含めて、こんなことができればいい、といったことはあるか。

委員 A-13：

もっと身近になればいいと思うが、現実問題としては難しい。費用面や人手等ハードルが高い。

委員 A-7：

子どもが通うデイサービスの施設が関わっている子ども食堂に食材提供をしたことがある。ただ、実施されていること自体あまり知られていない。デイサービスにチラシが貼っているが、そこに通う子どもや保護者しか見ない。

東大阪市の子ども食堂は民間企業による運営が多い印象。昼間営業していない飲食店で実施されていると、子ども食堂をしているのか判断が付きにくい。子どもからすると入りづらい。もう少し、子ども食堂感があるといい。

コーディネーター：

もっと子どもに認知され、身近で行きやすい子ども食堂になればいい。

一方で費用面等課題は多い。

他に子どもに対してできることはあるか。または、子どもの立場からもっとこういうことをやってもらいたい、といったことがあれば教えてほしい。

委員 A-26:

今話に出た子ども食堂について、あることすら知らなかった。このラウンドテーブルに出席している方を
含め、子どものためにしてあげたい・手助けしたいと思う方は多いはず。市からも取り組みについて周知
してほしい。

コーディネーター:

色んな関わり方があるはず。認知度をどう高めていくか。

市 HP に子ども食堂一覧は掲載されているか。

事務局:

市が運営補助をしている団体一覧は公開している。

コーディネーター:

行政からの周知はもちろん必要だが、自分たちも知る努力が必要となる。

他に感じることはあるか。

委員 A-7:

少し前に出た声かけの話について、子どもは先生から、知らない人に話しかけられてもついて行かない・
答えないよう教えられている。一方で地域の方は子どもが心配で、助けてあげたくて声かけをしてくれ
る。指導内容から見直す必要があるかもしれないと今日感じた。

一企業の経営者として地域ができることのうち、今実際行っているのは職業体験。前回の会議で、交通安
全教室にスタントマンが参加しているといった話があったが、市内にある自動車教習所の教員を引退され
た方にも参加してもらったらどうか。

放課後、バレーボール教室等で大人に小中学校の体育館を貸し出している。それができるのであれば、老
人会に貸し出して、昔の遊びを子どもたちに教える等関わりを持つ方法はあるのではと思う。

コーディネーター:

知らない人に話しかけられても、答えない・ついて行かないといった教えと地域の声かけは、ともすれば
対比するような考え方。とても難しいところ。この点については、今後 A 班の総意としてまとめていき
たい。例えば、学校が子どもたちへの伝え方を変えるのか、もしくは犯罪に巻き込まれない・安全を大前提と
するのかどうか。

職業体験への協力は大人ができるところ。その切り口なら高齢者も関わりが持てるかもしれない。退職さ
れた方がこれまでやってきたことを子どもたちに伝える、は次回のテーマである子どもとの接点、交流に
つながっていく。

自分の意見であるが、取り組みにあたっては「できる範囲で」を追加したい。ボランティアをベースに考える場合、「しなければならない」になると義務感が発生して、長続きしないことが多い。「したい」という思いのなかで、「できる範囲で」行うことは大切だと思う。

これまでの議論のなかで、感じたことはあるか。

委員 A-17:

公園で遊ぶ機会は減っている。中学へ入学してからはさらに減った。近くに3つほど公園があるが、1つ1つが小さいため、人がいるとできる遊びや遊べる時間が限られる。

コーディネーター:

どういう公園だったら遊べたと思うか。

委員 A-17:

花園中央公園はベンチやトイレもあり、近くにお店も揃っている。そういった設備が整っている公園なら行きたいと思う。

委員 A-12:

近くの公園は雑草が多く、ベンチが脆くなっており、安心して遊べるような環境ではなかったように思う。子どもたちが安心して、満足するまで遊べる環境になったらいい。

コーディネーター:

どこの自治体でも、公園の使い方は課題。子どもたちは花火やボール遊びがしたいと思うものの、騒音や安全性等の観点から禁止している。東京都杉並区では、今年の6月から来年3月まで試行的に公園の使い方を変えることになった。今までは区内すべての公園でボール遊びを禁止していたところ、一部仕切りをつけて、ボール遊び可能エリアを設置。花火については基本禁止だが、大きな公園であれば1週間前までに区役所に届け出れば、実施可能とした。まだ試行期間中であるが、区民からの評判はいい。クレームがどこまであるかは不明だが、子どもたちの話を聞いていると、満足度が上がっており、地域の集まりでは子どもたちが外に出るようになった、と聞く。東大阪市として、どこまでできるか課題はある。

B 班

コーディネーター：

前回の会議にて、支えている側の現役世代がどんどん減ってきて、高齢者の人数が増えており、高齢者とその他の世代との間に交流がないという話が出ていた。子どもが大人の付属物のように思われるが、しかしそうではない。子どもも自分たちの声を聞いてほしい。現役世代は負担が重い。その状況の中に活躍の場が欲しい高齢者がいる。この全体像を公助のパラダイムシフトと名付ける。例えば高齢者は担がれる方だったが、担ぐ側に回りたいこともある。つまり社会の担い手になる。そのことによってやりがいとか生きがいを見いだす。そうすることで現役世代の負担が軽くなる。もう 1 つ、高齢者と同時に子どもが担がれる側に回っている。子どもはいずれ現役世代となり、高齢者になる。それは公助の循環という。子どもにもできることはあるのではないかという話があった。子どもも現役世代も高齢者も全ての人が担ぐ側にも担がれる側にも回ることができる。そのようにすることで交流が始まり、分断されていた関係がフラットになる。これからの公助の考え方というのが、この間の議論で変わりつつある。

コーディネーター：

全体会及び定野さんの説明を受けての感想・興味関心や意見について伺う。

委員 B-27：

東大阪市の取り組みというのが、実際にはきちんと様々に行われていることが知れてよかった。自分自身全く興味がなかったというのもあるが、今日の説明を聞くまでそれらの施策を知らなかった。知らない人にも情報が入るような機会を作るため、メディア戦略に力を入れて施策をしていくとよいのではないかな。例えばテレビで市の取り組みを取り上げる等、人目があることによって施策がより良くなっていくのではないかなと思う。

委員 B-26：

計画や提案の中にあるような理想の東大阪市になったらよいと思った。

委員 B-24：

補助金をいかに使うかが結論だと思う。東大阪の自転車に乗っている人は全然ヘルメットを被っていない。子どもだけでなく大人に対しても、市から補助金を出して、全員にかぶらせるようにしてもらいたい。11 月から自転車の法律が厳しくなっている。この点だけひとつカバーできることはないかな。

委員 B-23:

今の子どもはとても大切にされていると思った。乗り越える力が無いようにも感じ、大人がそれをどのように乗り越えたらいいかというのを支えてあげたら、乗り越えられる課題もあるのではないかと感じた。

委員 B-22:

振り返りの説明がわかりやすかった。

委員 B-21:

公助の循環について気になった。人の始まりは子どもで、やがて現役になり高齢者になるという意識はとても大事であり、本質的な部分をついているため大変印象に残った。

委員 B-20:

東大阪市の取り組みについて、知らないことが沢山あった。それらの取り組みをどれだけ広めて興味を持ってもらうか。1人でも多くの人がそれに参加して、何か生きがいとして感じてやってもらう。ただ全員にそれに参加してもらうのは難しいと思う。そのため、これくらい参加者を増やすとこのように変わっていくという具体的な数字のイメージがあるとよいと思った。

委員 B-19:

東大阪市の施策の説明の中に小中学生の支援の話があったが、高校生が一番大変なのに支援が少ないと感じた。

委員 B-17:

先ほどの説明の中で一番ワクワクしたのが、プロスポーツチームの参加するイベントである。大人だけでなく子どももワクワクするのではないかと思います、とてもよい取り組みだと思った。実際今年の3月に東大阪でトップアスリートが参加するイベントが実施されている。今後どれくらいのスパンで実施していく計画なのか、そのようなところに興味がある。ぜひ計画についても知らせてもらいたいと思った。来年4月ぐらいから何か実施できたらよいのではないかと。それが実現すると、様々なことが加速していくと思う。あと、昨年度の提案書の中に、子どもの相談先の電話番号がすぐ出てくるようにするというものがあったが、すぐに実現するものなのではないかと思う。市役所の中で検討しているとのことだったので、実現に向けて知識等が不足しているのであれば専門機関に相談する必要があると思う。この提案書の中で一番すぐにできることだと思う。そのようにすぐできる部分は、計画を示して行ってもらえるとわかりやすい。

委員 B-15:

盾津中学校区のお祭りに行き来賓の野田市長のお話を伺った。東大阪市には外国人も多くおり多文化共生で、地域の繋がりを大事にするような、全国でもモデルとなる地域にならないといけないとおっしゃっていた。盾津中学校にも外国人が沢山おり、今回のお祭りも子どもたち中心に、いろんな歌や合奏等やっていてとてもいいと思った。今回の取組は、やはり地域の繋がりが一番だと思う。地域がどれだけ中心となって盛り上がるか。市役所や公の場にやってもらっても、やはり無理な部分はある。中心となる地域が人と人との繋がりが深められるように、お祭りがきっかけでもよいが、普段からの日常会話等での繋がりをもっと大事にしないといけないと感じた。誰かがしんどいとか、誰かが楽をしているということ言うかもしれないが、東大阪全体が、皆平等に楽しく過ごせるようにならないといけないと思った。

委員 B-14:

中学生の時に新型コロナウイルス感染症が流行っており、カースタントを見たことが無かったのでとても興味が出た。

委員 B-13:

他と比べたことはないが、東大阪市は税金が高いと聞く。確かに負担に感じることもある。税金を急に減らすことはできなくとも、自分の払っている税金が役に立っているのだということが明確にわかることができれば、現役世代は負担が重いだけで嫌だという様にはならないと思う。負担が重くて辛いというのを子どもが見て、子どもたちもその未来を背負っていくのが嫌だと思ってしまう。現役世代もどこかでよい気持ちになるような、そのような施策があればいいと思う。

委員 B-12:

これほど沢山の施策があると知らなかったというのが大きな印象である。役所が行う施策は税金が使われている施策であり、せっかく取り組んでいるのに知られていないのはもったいないと感じた。まさか出会いから結婚までお手伝いをしていくという施策があるというのも驚いた。様々なことを私たち以上に沢山考えて、市で取り組んでいることがわかってよかった。様々な施策があるため、おそらく頑張って利用すればお金ももらえて暮らしやすくなる部分は沢山あるだろう。ただイメージの問題もあり、例えば現役世代が税金の負担がしんどいと言っているのを子どもが見て、大人になっても結局しんどいという悪いイメージになっていく。出産した人はお金がなく、育児も仕事もしんどいというようにイメージが悪いのであれば、子どもを産みたくない、結婚したくないと思う気持ちもわかる。そのようなイメージを変えていくための報道や施策みたいなものが必要だと思った。

委員 B-11:

沢山の給付や助成があり、市で沢山考えてやっている。ただ、どれほど市民にそれが浸透しているのか疑問に思った。文字を沢山読むのはしんどいので、イメージを視覚的にアピールしていくのも1つだと思う。昨年度の提案書より沢山の検討されて進められているというのは、自分たちの意見がきちんと反映していると実感できる。あと、施策の取り組みにどれくらいの期間がかかるか、税金がどのように生かされているかという説明をしてもらえると、もう少し頑張ろうと思うことができる。やはり社会保険料や市民税住民税は高いと感じる。数字にするとその負担がともしんどく感じる。その負担にはどのような効果があるのか知ることができると払ってもよいと思うことができる。

委員 B-10:

昨年の会議でも詳細に様々な提案がされて、様々な手法で取り組みが進められている。それをどのように広報していくのか。この会議の委員は興味や関心があるから参加している方だが、興味や関心が無い方に対してどのようにアプローチするか。1つの方法として、学校で授業の合間でなにか展開できるのではないと思う。地域でどのようなコミュニティを作っていくか。そこに助言や補助をしていくのが市だと思う。市が前面に立ってやっていくのはまず無理だと思う。そのためコミュニティをどう動かしていくか、そのキーパーソンをどうするのかというところを市に検討してもらう必要がある。

委員 B-7:

昨年度の提案書の中に公園や遊び場のあり方を見直すという話があった。今はSNS等があって公園で遊ぶ人が少ないので、それはやはり見直すべきだと思った。

委員 B-6:

若者の未婚者が東大阪に住みたいと思うのか少し疑問に思った。出会いから結婚や就学まで、子育て世代に対しての子育て若者施策は多いが、現役世代の单身の方にとっては相当な負担があるように感じた。若者がこのまちに住みたいと思えるような環境を整える必要もあると思った。

委員 B-3:

市に様々な施策があることを知らなかった。60歳から65歳ぐらいまで働かれている方が高齢者になっていく。高齢者の交流の場づくりについて、せっかく知識とか体力とか人との繋がりがあるなかで、いきなりゼロから始めるというような前提になってしまっているのは少しもったいない気がした。働きたいという気持ちのある高齢者が集まって自分たちで活動できるような方法があってもよいのではないかと考えた。あと、ボランティアという言葉にひっかかる。せっかく高齢者も役に立つことをしているので、お金

をもらえたほうがいいのではないか。経済活動してもらえ、税金も納めてもらい、フレイル予防にもなる。お金を渡して活動を行ったほうが、財政面においても社会的に健全なのではないかと思った。

委員 B-1:

様々なことに取り組んでいると感心をした。しかしやっていることがわかりにくい。役所として様々な人に浸透するようにしなくてはいけないという前提はわかるが、もう少しPRを強調するような形で行うとよいと思う。長い説明は疲れてしまうのでもう少し整理してほしい。実施している取り組みは沢山あるので、とにかく今回はわかって欲しいというようにやらないといけないのではないかと思う。

コーディネーター:

同じ話を聞いても興味関心を持つところは人によって違う。皆さんの発言より、様々な取り組みをしていてよくわかった、実行していった欲しいとかそういうようなお話も多くあった。一方、多くの人がこんなにやっているとは知らなかった。広報、PR、広報戦略も、もっとやっていったらよいのではないか、そんな思いもあった。実際にこういういろんな重要な施策を進めていく上で、市が前面でやるのは難しいのではないかと。コミュニティというのが大事なのではないか。あるいは、お祭りという例もあり、そういったコミュニティや地域の繋がりも大事ではないか。皆さん様々な視点をお持ちだが、なにか繋がる場所もあると思った。

コーディネーター:

現役世代の負担が大きい。それでは若い人たちはみんな嫌だと思ってしまう。だからもっといいイメージはないのか。確かに社会に貢献しているという、大きなことがある。ただそれが抜けていた。子どもたちもそのような大人を見ていて、嫌だと思う。そうではないということを見せないといけない。そして、非常に大きなポイントは、現役がお年寄りになって担がれる側になるのが、そうではなくて、これまで働いてきたのだからそういったノウハウとかスキルとかをスライドして、つまり高齢者が現役のまま、お年寄りが担ぐってというスタイルだってあるという話もあった。もう1つ、交流って書いてあるけども非常に地域の考えが大切である。交流とは地域の繋がりで、1つの社会になるみたいなのが考えた。もう1つ、提案書の中にある行政でできることについて、確かにすぐできることもある。いつまでに何をやるかという説明はなかったため、確かに皆さんが知りたい部分であったと思う。今までやっている内容が重要だが、いつまでに何をやるかという目標があって、現在の進捗状況がやはり知りたい情報だと思う。そういう視点を持って行政のサービスをPRするというのはとても重要だと思った。

コーディネーター:

課題や今後の取り組みとして考えられることについて意見を聞く。

委員 B-3:

行政サービスが伝わっていないことが課題だとしたら、個人としては、例えば家族等にこのような利用できるサービスがあると声かけをすることができると思う。地域としては、小学生の頃から学校で行政サービスについて教育していくのが大事だと思う。行政としては、もちろん広報していくべきだと思う。

委員 B-10:

今回のテーマから、やはり子どもから高齢者をどうつなげていくかというところ。全体をつなげるっていうのは、なかなか難しいとは思うので、ここで現役を飛ばして、子どもと高齢者をつなぐ場所を、いかにしてつくれるのか。例えば小学校とか中学校の教室をお借りするということになると、やはり先生方の負担っていうのが出てくるのか。残らないと駄目なのか。前回土曜、日曜、関係なしに出勤をされているというお話が出ていた。地域には必ず小学校があるので、それをどう活用していくかというのが一番近道なのかなという思いが個人的にはある。ただ、いろいろ教育法の関係があるから、そこには絶対に先生方がいなければならないということになると、先生方の負担が大きくなってしまうので難しいとは思う。その辺も、法律の問題も出てくると思うが、地域の責任者を決めて、そこで何かしらの活動をするのがよいと思う。

コーディネーター:

社会教育法があり、地域が社会教育の核にならなくてはいけないという決まりがある。今お話のように、地域の方が集まって話し合いをしたりとか、文化活動をしたりとか、学校開放で体育館や校庭を貸しているような事実はある。そのような時にいつも非常に課題になるのは、誰がどうやって管理していくのかというところである。なので、これは1つの例だが、足立区の小学校では土曜日と日曜日で価格をきちんと決め、職員を派遣や委託している。鍵をきちんと管理をして開放するというような例はある。少しずつそれで改善していけば、学校や教員の負担を重くせずにできる可能性はある。

委員 B-15:

個人としては、地域と学校は繋がっていくしかないと思っている。なので、子どもたちは地域に世話になっているし、地域が子どもたちを育てるという意識はもっと高くないといけないと思う。しかし学校を使うとなると、やはり物がどこにあるか知っているのは学校の人間なので、学校の人間が要る。ただそうすると、教師がずっと働くことになるので、やはり行政の方をお願いして誰かを雇うという今のお答えは当然だと思っている。地域の方が子どもたちを知ることが大事で、溝ができてしまうと育たない。地域の繋がりは災害時等の緊急時の繋がりにもなる。小さなこと、例えば朝のおはよう当番や帰りのお迎え等、様々なことで地域の方が子どもたちと繋がると、保護者も一緒に参加し、様々な部分で広がりが見えてく

る。学校運営協議会というのもある。しんどい思いもあるとは思いますが、みんなが温かい目で、参加していないといけない場所だと思う。

<Liqlid での意見について説明>

コーディネーター：

Liqlid での意見を聞き、例えば地域の健康とか、自然を使うとか、これまで会議で出ていない話題もあったので、そういったところに少し視野を広げてもよいと思う。高齢者が病気にかかわらず健康に過ごすことを実現するのは地域にとっても非常によいことである。健康であることで地域のために様々な貢献ができるはずである。お金を落とすことも含め、そのような視点で会議のテーマに繋がっているのではないかな。

今後の課題や取組みとして考えられることについて意見を伺う。

委員 B-1：

茨木市の方によく行くのだが、去年ぐらいにおにクルという施設ができた。子どものための市の施設らしい。将棋の竜王戦をやるような施設であり、どうなのかというふうに見ていたが、平日に一度行くと、結構利用者がいた。施設の前に芝生があり、小さな子どもとお父さん、お母さんが遊んでいる。楽しそうな風景が広がっていて、やはりこのような施設があることは有用性があると思う。この施設には高齢者の方はいなかったが、もちろん何かすれば高齢者を呼び込むこともできるだろう。そのような居場所づくりを東大阪で鑑みた場合、市に中心地というような場所はないように思う。おにクルは阪急茨木市駅とJR茨木駅のちょうど間ぐらいにあって、市役所の隣で、集まりやすい。しかし東大阪市の場合は、そのように高齢者等が簡単に訪れることができるような場所を作るにしても、地理的に非常に移動しにくい。東大阪市ではある程度住宅と工場が近接しているためトラックが結構多く、あまり気軽に高齢の方が歩くことができないような市の構造的な問題もある気がする。そのため、何か案を考えるとその点で難しい部分がある。市の中心地がないと、集まりにくく、頭の中にイメージして提案するのが難しいと思う。

コーディネーター：

まさに地形等の変えられない部分での課題はあると思う。あえて変えられるものに焦点を当てていくと良いのか。ただそのようにすると根本的な課題にならないのかもしれない。

委員 B-6：

近所でお祭りがあり、地域の繋がりとしてお祭りに参加したらどうかとよく言われるが、市に途中から転入してきたこともあり、お祭りにあまり興味が湧かない。私が、地域のお祭りによいイメージを持っていな

いというのが実際のところである。子どもたちが参加しやすいように、お祭りを運営する人たちも飲酒とか喫煙が無いようなクリーンなお祭りとなる取り組みを、地域として進めたらよいのではないだろうか。そうだったとしたら、自分も子どもを連れて地域のお祭りに行ってみようかと思うし、行政からも補助金など含めフォローしてもらえるようになるのではないかと思う。

コーディネーター：

地域のお祭りを楽しんでいる人はもちろんいるが、もっと多くの人を巻き込む工夫や方法もあるのかもしれない。

委員 B-7：

子ども食堂や第3の居場所について Liqlid の中に書いてあって、どこにあるのかとかどれぐらいあるのか。子ども食堂について聞いたことはあるが、自分の家の近くにあるのか、どれぐらいあるのかは知らない。実際に利用しない人もそのような情報を知っていた方がいいと思う。

コーディネーター：

広報の話に繋がってくる話である。

委員 B-10：

東大阪市に半年ぐらい住んでいるが、自転車に乗る人がとても多いと感じる。みんなかなりスピードを飛ばして自転車を走行しているが、道路の幅はそれほど広くない。なおかつ自動車も細い道であっても結構スピード出している。小学校も近くにあり危険である。今日の新聞の記事では、小学校の見守り隊が高齢化によって全国的に減少していると取り上げられていた。

コーディネーター：

子ども・高齢者ファーストで安全安心な道を作っていくために、自転車に乗る私たち一人一人が気をつけることが、私たち住民にできることだと思う。

委員 B-11：

東大阪市は道路が狭く、交通マナーが悪いと普段より感じている。狭い道に自動車が走っており、かなり通行者すれすれで通り過ぎることもある。道路を広くするのは難しいと思うが、例えば電柱を埋没にする等して工夫できるのではないだろうか。

コーディネーター：

電柱の埋没等は行政で検討しないといけないことであり、一方で自分たちが何かできることもあると思う。

委員 B-12：

もう8年間ほど東大阪市に住んでいるものの、他所から来たということもあり、子どもや高齢者を含めて近所の人の顔や名前を知らない。近所の公民館ではよく集まりがあり、寺や神社ではお祭りをしているという張り紙は見るものの、実際に参加したことはない。そのため、地域と自分はほぼ交流が無い状態である。Liqlid にも書いたが、近所の子どもや高齢者について名前まで全て知らなくても、顔見知りになった方がよいと思う。自分自身ずっと思っていることだが実際になかなかできてないことである。あの人は2軒先に住んでいる人、この子はあの家のお子さんといったように近所の人のことを少しでも知ることができているとよいと思う。近所の知らない人という認識から知っている子どもや高齢者になるということが大事だと常々思う。例えば、夜中に1人で見かけたとしたら、全然知らない人よりも少し知っている人だと、どうしたのだろうと興味を向けるだろう。しかし近所の人について知るのはなかなか難しいことでもある。顔見知りになれるような行事等に参加するかどうかの話になってきてしまう。しかしやはりそのようなところが個人としてできることであり、興味を持ち行事等に参加し、自分から関わっていき顔を知っていく必要があるのだろう。そのような関係性ができると、例えば地震が起こった場合、避難所で過ごすことになったとしても顔見知りの人がいるだけでも安心感があり、顔見知りのおばちゃんが閉じ込められた状況になってしまったら協力的に動こうとするだろう。以前に漫画で読んだ話で、保育園の騒音問題があり、近所の高齢者から苦情が寄せられていた。その問題をどのように解決したかという、高齢者と子どもを繋げていった。高齢者が育てている畑の手伝いや芋ほりに子どもが参加することで高齢者と子どもが関わり、〇〇君、〇〇おじいちゃんというのがお互いわかり、知り合うことで、苦情が無くなり、ただうるさいと言っていたものが元気に遊んでいるなという認識に変わった。そのようにお互いに知り合っていくというのは大事だと思う。そのような交流の場所や行事等に参加していくことがよいと思った。

コーディネーター：

今回の会議を通じてアンテナが立ったことで、そのような交流行事に出てみようかと思われる方もいらっしゃるかもしれない。それを東大阪全体の様々な地域でのムーブメントにしていくような工夫ができるとよい。

コーディネーター：

自分の学校でも、小中学生で挨拶運動をしている。そのようなことで知り合いになり、その学校に通っている子どもと認識するということは非常に重要である。お祭りとか行事等に参加するのは大変かもしれないが、挨拶をするのはとてもよいことだと思っている。子どもは素直に挨拶する。子ども同士の交流に限らず、子どもを媒体に何かそのような行動を起こすと、大人はしょうがないと思って挨拶を返してくれるようになるのではないかと思う。

委員 B-13：

最近、東大阪市に全然来たことがない人に東大阪市を紹介するという内容の記事を読んだが、自分が知らないだけかもしれないが、東大阪市は本当に紹介するところが少ないと思った。石切神社に行って、司馬遼太郎記念館に行って、紹介するところはもう終わってしまって違う場所に移動したことがある。なかなか結婚されて子どもができた人に来てもらうためのよい施設が全然無い。引っ越して住みたいと思うきっかけになるものだと思うが、長年住んでいて正直なところ別に紹介するとかそんなになかったと感じる。なかなか個人間で要望出したからといって無理な話だと思うが、行政等で大きな土地があるのであれば施設を誘致してはどうか。昔は東大阪市にあった映画館も無くなってしまった。自分が高校生の頃は、友達と学校帰りに映画を見に行こうと言って、文化的な活動も東大阪の中でできていた。そのような遊びが難しくなってしまったので、そのような施設があったらとても魅力的だと思う。交通の便はとてもよいので難波等へ移動して東大阪市を出て行ってしまう人が多いと思う。東大阪市にそのような施設ができれば、東大阪市で消費活動もできると思った。

コーディネーター：

東大阪市の交通の便がよいがゆえに市外の別の場所へ行ってしまう。東大阪の魅力も発見する必要がある。

委員 B-14：

東大阪市には買い物できる場所が少ないと個人的に感じている。電車で梅田等に行ってしまう。市の町並みの景観を壊さない程度の規模のショッピングモールが欲しい。

委員 B-15：

高齢者は何でもできるような方がとても多いと思っている。園芸や畑作業、裁縫、囲碁、将棋等の得意分野をもっているような方も沢山いる。やはり子どもと高齢者で繋がることのできる部分がある。地域と学校が繋がるのはもちろんのこと、行政も間に入ってもらいたい。学校で何か交流の場を設ける際に、連絡

を取る場面等で行政の力を借りて地域と学校のパイプ役になってもらいたい。点字体験や福祉体験等についても行政が参加した方がみんなで取り組んでいくことができると思う。

委員 B-17:

居場所づくりが課題となっているが、やはり高齢者と子どもを繋げることはよいと思う。保育園と老人ホームが併設している施設があり、老人ホームで毎回子どもが参加するようなイベントがあり、そのような交流はとてもよいと思う。そのような交流が日常的に行われたら非常によいと思う。東大阪市の地蔵盆に子どもと一緒に参加しており、そのイベントにも子どもと高齢者の繋がりが生まれている。子どもはお菓子をもらい、少しゲームができるようなものである。運営されている人が高齢者で、参加するのが子どもであり、親と一緒に行く。そこには高齢者と子どものコミュニケーションがあり、地域の繋がりの一環になっている。子どもはお菓子をもらい非常に楽しんでいる。高齢者もわざわざ家からアイスクリーム等を地蔵盆のために追加で持ってきてくれたりしている。高齢者にとっては生きがいになり、子どもにとっては地域のおじいちゃんやおばあちゃんを覚えるきっかけとなる。以前、顔見知りではない高齢者が大きくなったねと子どもに対して何度も言われたが、子どもと親の自分は少し怖く感じた。やはりこれは知らない人だからである。もしお互いに知っていたらそんなことはなかっただろう。個人として今後できることとして、もう少し親の自分からコミュニケーションを取ることで、子どもと高齢者のコミュニケーションに繋げていくことができると思う。地蔵盆に対する参加費や会費を払っているわけではないのに参加してお菓子までもらって申し訳ないと思うのではなく、地域の活動の一環であるため、そのような繋がりを意識することが大事だと思った。行政の役割としては、例えばテントやかき氷機の修理費等に対して行事の補助金があると良いと思う。お菓子をもらうだけの行事ではなく、地域の活性化やコミュニケーションを深めることも自分たちや行政の役割だと思っている。そのような小さなことから意識していくことも大事である。

委員 B-19:

地元の小中高では市の活動をしていると思うが、東大阪市内に住んでいる子ども全員が東大阪市内の学校に通っているわけではない。少数ではあると思うが、そのような人たちにも東大阪市の政策を知ってもらえるよう、学校外でも地域の活動を増やしたら、東大阪市内に住んでいる全ての人に興味を持ってもらえると思った。

委員 B-20:

やはり現在市で行われている様々な施策がなかなか周知されておらず、知らない人も多いというのが一番の課題だと感じる。一番小さなコミュニティは家族であり、その次はやはり自治会だと思う。自分が自治会の担当になったときに何をしているかという、市政だよりを1軒ずつ配るだけであり、直接フェイス

トウフェイスで近所の人と話すわけでもなく、自治会費を回収するくらいである。なかなか自治会のコミュニティがうまく使えてないと感じている。市が自治会に対してどれだけ働きかけることができるのかというのはわからないが、自治会を活用して、そのコミュニティの中で市が進めていることを1つ1つ検討していくと、様々な改善点や意見が出て、よいものになっていくのではないかなと思う。東大阪市は全国に先駆けてラウンドテーブルを実施していると聞いた。市ではおそらく様々なところから情報収集をしていると思うが、様々な問題に対して日本だけではなくて海外も含めて、うまくいっているモデルケースを参考にすることで何かヒントが得られると思う。

委員 B-21:

様々な話聞いて、個人的に一番大事なことは0歳から2歳までの保育料無償化だと思う。幼稚園についても完全に無償化するべきだと思った。もう1つ意見として、子ども議会というのが昨年度のラウンドテーブルの提案書にもあり、この重要性を高めていく必要があると思う。ラウンドテーブルのようにギフトカード等を配って重要性をアピールし、比例選挙のように4年おきに開催する等して、行政の一部として実施するのが良いと思う。

委員 B-22:

通っている学校の通学路にガードレールがあまりない。学校の傍の道にはあるが、その他の道で車が通ると危ないと感じることがある。道路にガードレールをもっと増やした方が良いと思う。

委員 B-23:

子ども食堂が回覧板に載っており、自転車のヘルメットも来年4月まで補助金が出る等、市が様々なことで頑張っている。行政が行っていても、説明不足なのか、理解をしようとしていないのかはわからないが実際に知られていない。道路の整備にしても、みんなが利用するわけではない。違反する人は違反する。何のために整備をしているのか疑問に思うことがある。何が正しいのか考え方は様々あるが、どのようにしたらみんなで考え方を共有できるだろうか。

委員 B-24:

東大阪市は中核市になった平成17年には人口50万人を超えていたが、令和2年には49万人を切っている。自分自身が後期高齢者になり、保険料が7月から来年3月まで73万円、介護保険料は年間54万円払っている。働けば働くほど税金が取られる。自分の子どもたちも市の税金と水道代が高いこともあって、東大阪市を出て行った。交通の便でいうと、南部で電車が通っておらず市内が動きにくい。今東大阪が1つになるなら、やはり東大阪音頭だと思う。あまり知られていないと思う。中村美律子さんやつんく

☞さん等の大勢の有名人がいる。1つ考えて、みんなで歌うようなことはできないかというふうに思った。

委員 B-26:

実際に子育てをしている母親の友達に聞いたが、仕事をしており留守家庭に子どもを預けており、それが東大阪市では毎月8500円かかっている。大阪市は年間500円だと聞く。かなり差額があり、東大阪市の金額が高く感じる。自分は大阪市内から東大阪に移り住んだが、水道代等をはじめとして東大阪市はなにかとお金がかかると感じる。そこをなんとかしてもらえるとよいと思う。

委員 B-27:

この会議の様々な意見を聞いて、本質的な問題がやはりお金に関わってくると感じた。みんなの提案は絶対実現すれば社会的によくなるものだと思う。ただ、全部お金が絡んでいてそこが問題になっていると思う。お金が問題なのであれば、お金を東大阪で生み出せるようなシステムを作ることに取り組んでいく必要がある。例えば、起業家を誘致し、海外から留学生が沢山来るのであれば留学生が働きやすいような環境を整備する。そのような取り組みで財源を確保し、様々な課題に対してお金を投資できるような仕組みを作っていくことができればいいと思う。やはりその上でいつまでに何を実現するかが決まっていないと、何年先の未来の話になるのかよくわからない。1年後には高齢者が増えると言われているが、10年後には後期高齢者は一体どれぐらいの人数になっているのか。施策が実現したときにもう意味が無い状態であれば、機会損失で時間の無駄になってしまう。

コーディネーター:

今日は本当に様々な提案をいただき、これをさらに今後のB班の話し合いに生かしていきたいと思う。

コーディネーター:

やはりポイントは地域の中で繋がっていくにはどうしたらよいかということである。最後に東大阪音頭という話も出た。気持ちも1つになって、場所があって、交流があって初めて、こういったことが成立するのかなというふうに思う。次の会議までにまとめてお話ししたいと思う。

5.今日の会議まとめ

A班

第2回は子どもにスポットを当てて議論した。

①東大阪市の子どもたちが今よりも住みやすいと感じるためにはどうすればいいか。

また、子どもたちはどんなことに不便さを感じているか。

問題1:勉強できる場所がない

【出た意見】図書館は利用者が多く、長時間の自習を禁止しているところもある。

放課後、学校の教室を利用できないか。公民館・廃校・空き店舗を活用できないか。

また子どもと高齢者の交流といった視点から、定年退職された人がこれまでの経験を活かして、子どもに勉強を教えるといったことができないか。

問題2:給食が美味しくない

【出た意見】

残食が多く、学校から帰ってすぐに家で食事する必要がある。

学校生活において給食は重要な要素。子どもファーストを考えるうえで大切。

【参考】東京都足立区での取り組み

- ・自校調理方式のため、各校で残菜率を毎月区へ報告。
- ・有名なシェフを招き、同じ材料で調理してもらうことで、問題の洗い出し。

【次回】事務局から説明をお願いしたい。

問題3:公園のあり方について

【出た意見】ボールが使えない・日陰がない・トイレがない・雑草が多い・ベンチがない

→引き続き議論していく。

問題4:子どもへの声かけについて

【出た意見】子どものことを考えると挨拶はできるだけしていきたい。ただ、知らない人から話しかけられても、答えない・ついて行かないの教えがある。どうバランスをとるか。

いざというときに備えて地域の支え合いは大事。

【参考】愛ガードの取り組み→挨拶し合える関係性ができている。日頃からの積み重ねが大事。

②大人として何ができるか。

○子どもをしっかりと観察していくこと・声かけを続けていくこと

○職業体験への協力

○子ども食堂の認知度を上げ、協力者を増やしていくこと・子どもにとって身近なものにすること

③次回に向けて

「子どもと高齢者がどのような形で交流していくのがいいのか」、「接点を持つためにはどうしたらいいのか」について議論していきたい。

B 班

① 子どもや高齢者を含む、みんなが住みたいと思うような魅力的なまちになるにはどうしたらよいか。

問題1:行政サービスとしてある子ども施策・高齢者施策について市民が知らない

【出た意見】東大阪市での取り組みについて知らない人が多い。広報や PR 等に力を入れて行い、わかりやすく利用者へ広める必要がある。

問題2:子どもが大人になることによいイメージを持つことができない

【出た意見】子どもが親世代の大人に対して大変そうだという印象を受けて、将来に希望を持つことができない。よいイメージが無いことで結婚や出産をしたくないと思ってしまう。税金を払うのがしんどそう。→税金の使い道について知ることが出来ていたら、社会に貢献していると実感することで悪いイメージを払拭できるのではないかな。

問題3:人が集まる施設が無い

【出た意見】子育て複合施設や商業施設、映画館等の魅力的な施設を作るとよいと思う。まちの中心地となるような場所が無い。

問題4:交通安全について

【出た意見】自転車や自動車の交通マナーが悪い。道路が細い中で危険な運転がよく見られる。ガードレールがあったほうがよいと思う場所にガードレールがない。電柱の埋没等で道幅を広げることはいかない。

問題5:支援が届いていない人たちがいるように感じる

【出た意見】小中学生への支援施策は手厚いと感じたが、高校生への支援が少ない。現役世代への負担が大きく、税金の支払いもしんどいと感じる。単身世帯の若者もこのまちに住みたいと思えるような環境を整える必要がある。

問題6:具体的な目標がわからない

【出た意見】昨年度の提案書から現在取り組んでいる内容について、今後どのようなスケジュールでどのような達成目標を掲げているのか明確にしたほうがよい。

② 子どもと高齢者が地域で繋がるためにはどのようにしたらよいか。

案: 学校での人の繋がり

【出た意見】学校の教室を利用して交流の場を作る。学校の先生ではなく、職員を派遣する等して学校側の負担を増やさないようにする。行政と連携して運営する。

案: 地域行事での人の繋がり

【出た意見】飲酒や喫煙が無いクリーンなお祭りに子どもを連れていきたい。地藏盆で子どもと高齢者が実際に交流している。

案: その他の人の繋がり

【出た意見】老人ホームで子どもが参加できるイベントを頻繁に開催する。自治会を活用して近所の人と交流を深める。

③大人として何ができるか

○家族等身近な人が利用できる行政サービスについて理解していない場合、声掛けを行う。

○学校で行政サービスについて学ぶ機会を設ける。

○近所の人と顔見知りになるように地域の行事やイベントへ積極的に参加する。

○子どもと高齢者との間に立って、積極的に関わりを深める。

④次回に向けて

「子どもと高齢者、そして現役世代が地域で繋がるにはどうしたらよいか」について今後話し合っていきたい。

6.事務連絡

7.閉会

<省略>